

研究ノート

日本人大学生における対人嫌悪に関する記述統計と性差

Descriptive Statistics and Sex Differences of
Interpersonal Dislike in Japanese College Students

河野和明*, 羽成隆司**, 伊藤君男*

Kazuaki KAWANO, Takashi HANARI, Kimio ITO

キーワード：対人嫌悪，性差，質問紙

Key words: dislike, sex differences, questionnaire

要約

日本人大学生を対象として実施された調査結果を再分析することによって、自分を嫌っている他者の人数、好かれている人数、嫌いな他者の人数、最も嫌いな人の性別と年齢、嫌われていることを初めて自覚した年齢（被嫌悪自覚年齢）について性差を中心に検討した。その結果、嫌われていると認知している人数の総数は平均約3名であり、嫌っている人数総数よりも有意に少なかった。また、男女とも自分に好意をもっていると認知される他者数は同性が多かったが、女性は男性よりも多数の同性から好かれていると認知していた。最も嫌いな人については、男女とも同性を嫌悪する傾向が見られたが、男性でこの傾向がより明瞭であった。被嫌悪自覚年齢は、男女とも平均約10歳であった。結果をもとに本研究の測定の問題や対人嫌悪の意味が論じられた。

Abstract

This study aimed to show basic statistics and sex differences of some aspects of interpersonal dislike feelings, using the data from the authors' previous study. The mean number of others who dislike the responder, others who like the responder, and others whom the responder dislikes were calculated. Sex and age of persons who the responder most dislikes, and the age at which the responder first recognized that the other person disliked him/her were analyzed. The results show that the responders reported about three others who dislike them and this was significantly less than the number of others whom the responder dislikes. In each sex, the number of same sex others who like the responder was

* 東海学園大学人文学部心理学科 ** 椋山女学園大学文化情報学部メディア情報学科

significantly more than the number of opposite sex others, and for females it was significantly more than for males. For the most disliked person, it was shown that responders of each sex tended to dislike a same sex person, and this tendency was clearer for the male responders. The age at which others dislike the responder was first recognized was about 10 years old in each sex. The problems of measurement in this study and implications of interpersonal dislike were discussed.

問題

本研究は研究ノートとして、日本人大学生を対象に実施した質問紙調査の結果から、対人嫌悪をめぐる周辺的な分析結果を報告するものである。ここでは主として、何人程度の他者から嫌われていると感じているか、好かれていると感じているか、逆に何人程度の他者を嫌っているかを示し、これらに対して性差分析を行った結果を示す。

これまで著者らは一連の対人嫌悪研究において様々な調査研究を実施し、特に互恵的関係の維持 (Trivers, 1971) の点から対人嫌悪が社会関係の調整として機能する様相の一部を示してきた。例えば、先行研究 (斎藤, 2003) で示された嫌悪的な他者の性格的特徴の中では、互恵的な関係にとって脅威となる「自己中心的な他者」がもっとも避けられ拒否されやすいことを示した (河野ら, 2015)。また、一般に対人嫌悪感の対象人物に対する援助行動を抑制する (例; Regan, 1971; 竹村・高木, 1990) が、外見的要因を除く嫌悪理由の中ではとりわけ、「自分との違い」による嫌悪と「相手の自己中心性」による嫌悪が援助をより強く抑制することが示唆された (河野ら, 2016)。一方、他者から嫌われたくないという心理傾向 (被嫌悪回避傾向; 河野ら, 2014) は、他者への援助を維持するように作用していた。さらに、対象人物の社会性、外見的魅力、知的能力といった広義の資源が大きいと認知した場合には、嫌いな相手であっても援助を増大させていた (河野ら, 印刷中)。全体として、対人嫌悪の感情的側面は互恵的關係にとって脅威となる対象者を強く回避させる一方、嫌われることを避ける傾向が行動をより互恵的にさせることで互恵的關係の維持形成に寄与していると解釈されたが、それに加えて、対象者の資源量に応じて援助量が調整されていることが示唆された。

このような比較的詳細な要因分析に対して、最も基本的な側面である嫌悪対象者の数といった単純な量的記述に関する報告はこれまであまりなされていない (例外は、日向野, 2007; 日向野, 2008)。そこで本報告では、これまでの調査研究の中で付随的に得られてきた結果を整理して、対人嫌悪に関する記述的な統計を示す。

特に本報告においては、性別に記述統計量を示すことによって性差を中心に検討する。これまで対人的な心理行動特性にある程度の性差があることが知られている (例えば、落合・佐藤, 1996; Balliet et al., 2011)。したがって、対人嫌悪においても一部に性差が見られる側面があると予想

される。ここでは、取り上げた測定変数によって以下の分析を行う。すなわち、(1) 嫌悪に関する他者の人数（嫌われている人数、好かれている人数、嫌いな人数）の性差、(2) 嫌われている人数と嫌っている人数の比較、(3) 最も嫌いな人の性別と年齢、である。これらに加えて、(4) 嫌われていることを初めて自覚した年齢についても検討する。

方法

被嫌悪回避尺度を構成することを主な目的として実施された前報（河野ら，2014）の調査データを再分析した。一部前報と重複するが、調査の概要を以下に示す。

参加者 東海地方の大学生 388 名（男性 191 名，女性 197 名）を対象とした。平均年齢は 19.99 歳（SD=1.36）であった。

質問紙 質問紙は以下の項目を含む多数の項目から構成されていた。以下では、本報告において言及する項目についてのみ記載する。

被嫌悪人数・被好意人数・嫌悪人数 対人好悪感情に関する質問項目を設定した。そこでは、実際に身の回りの他者からどの程度嫌われていると主観的に感じているかを測定するために、「今現在も直接顔をあわせる人物で、あなたのことがあまり好きでないと思っていたり、あなたに対して苦手意識をもっているあなた自身が感じる人」の具体的な数を、想定される人の性ごとに尋ねた（以下、人物の性が男性の場合の数を「被嫌悪男性人数」と呼び、想定される人物の性が女性の場合の数を「被嫌悪女性人数」と呼ぶ）。同様に、身の回りの他者からどの程度好かれていると主観的に感じているかを測定するために、「今現在も直接顔をあわせる人物で、逆に、あなたに対して好意や好感をもっているあなた自身が感じる人」の具体的な数（親・きょうだい・親戚を除く）を男女ごとに尋ねた（以下、好意を寄せている側が男性の場合を「被好意男性人数」、女性の場合を「被好意女性人数」と呼ぶ）。さらに、「あなたが今現在も直接顔をあわせる人物で、あまり好きでない人、苦手な人」の具体的な数を男女ごとに尋ねた（以下、人物が男性の場合の人数を「嫌悪男性人数」、女性の場合の人数を「嫌悪女性人数」と呼ぶ）。

最も嫌いな人 「これまでの人生の中で、あなたが最も嫌いな人、好きでない人、苦手を感じる人」を 1 名想起することを求めた。この際、「好きでない人や苦手な人がいなかったなら、好きな程度や好感度が最も低かった人」を思い浮かべるよう要請した。その後、その人物の性別およびおおよその年齢を尋ねた。

嫌われたことを初めて自覚した年齢 他者から嫌われたことを初めて自覚した年齢（以下、被嫌悪自覚年齢）を尋ねるため、「あなたが人生で初めて特定の他者から『嫌われている』と自覚したときのおおよその年齢」について、具体的な年齢の数値による回答を求めた。

結果と考察

被嫌悪人数・被好意人数・嫌悪人数の性差 回答者の性ごとに示した被嫌悪男性人数、被嫌悪女性人数、被好意男性人数、被好意女性人数、嫌悪男性人数、嫌悪女性人数のクロス集計表を示す (Table 1-6)。いずれも0人を最大として人数が増加するに従っておおよそ度数が少なくなる、いわゆるL字型分布を示した。この場合、正規分布から逸脱しているためパラメトリック統計量が使えない。このことが、これに類する測定値があまり報告されない理由のひとつと思われる。そこで、ひとまずそれぞれのクロス集計について χ^2 検定を行ったところ、被嫌悪男性人数および被嫌悪女性人数には回答者の男女間に有意な偏りは見いだされなかったが、被好意男性人数 ($\chi^2=36.57, df=17, p<.01$) および被好意女性人数 ($\chi^2=54.80, df=18, p<.01$) には回答者の男女間に有意な偏りが示された。一方、嫌悪男性人数には有意な偏りは見いだされなかったが、嫌悪女性人数 ($\chi^2=24.09, df=12, p<.05$) には有意な偏りが示された。いずれも5の倍数のような区切りのよい人数で回答する傾向がうかがわれ、これらの回答の一部が曖昧な人数把握に基づいていることを示唆している。

Table 1. 回答者の性ごとに示した被嫌悪男性人数の度数

被嫌悪男性人数(人)	男性回答者	女性回答者	合計
0	87 (47.3%)	102 (54.5%)	189 (50.9%)
1	18 (9.8%)	25 (13.4%)	43 (11.6%)
2	32 (17.4%)	25 (13.4%)	57 (15.4%)
3	19 (10.3%)	14 (7.5%)	33 (8.9%)
4	6 (3.3%)	4 (2.1%)	10 (2.7%)
5	14 (7.6%)	7 (3.7%)	21 (5.7%)
6	1 (0.5%)	2 (1.1%)	3 (0.8%)
8	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
10	2 (1.1%)	6 (3.2%)	8 (2.2%)
15	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
20	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
25	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
40	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
50	0 (0.0%)	1 (0.5%)	1 (0.3%)
合計	184	187	371

Table 2. 回答者の性ごとに示した被嫌悪女性人数の度数

被嫌悪女性人数(人)	男性回答者	女性回答者	合計
0	97 (52.7%)	71 (38.0%)	168 (45.3%)
1	28 (15.2%)	26 (13.9%)	54 (14.6%)
2	17 (9.2%)	37 (19.8%)	54 (14.6%)
3	17 (9.2%)	21 (11.2%)	38 (10.2%)
4	5 (2.7%)	8 (4.3%)	13 (3.5%)
5	9 (4.9%)	15 (8.0%)	24 (6.5%)
6	2 (1.1%)	4 (2.1%)	6 (1.6%)
7	0 (0.0%)	1 (0.5%)	1 (0.3%)
8	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
10	3 (1.6%)	3 (1.6%)	6 (1.6%)
15	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
20	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
40	2 (1.1%)	0 (0.0%)	2 (0.5%)
50	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
合計	184	189	371

Table 3. 回答者の性ごとに示した被好意男性人数の度数

被好意男性人数(人)	男性回答者	女性回答者	合計
0	44 (24.2%)	73 (38.6%)	117 (31.5%)
1	11 (6.0%)	25 (13.2%)	36 (9.7%)
2	19 (10.4%)	24 (12.7%)	43 (11.6%)
3	26 (14.3%)	14 (7.4%)	40 (10.8%)
4	10 (5.5%)	7 (3.7%)	17 (4.6%)
5	20 (11.0%)	26 (13.8%)	46 (12.4%)
6	6 (3.3%)	3 (1.6%)	9 (2.4%)
7	8 (4.4%)	2 (1.1%)	10 (2.7%)
9	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
10	16 (8.8%)	7 (3.7%)	23 (6.2%)
11	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
12	2 (1.1%)	2 (1.1%)	4 (1.1%)
15	6 (3.3%)	2 (1.1%)	8 (2.2%)
16	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
20	8 (4.4%)	1 (0.5%)	9 (2.4%)
26	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
30	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
40	1 (0.5%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
合計	182	189	371

Table 4. 回答者の性ごとに示した被好意女性人数の度数

被好意女性人数(人)	男性回答者	女性回答者	合計
0	66 (36.5%)	32 (16.8%)	98 (26.4%)
1	21 (11.6%)	8 (4.2%)	29 (7.8%)
2	24 (13.3%)	16 (8.4%)	40 (10.8%)
3	21 (11.6%)	18 (9.5%)	39 (10.5%)
4	9 (5.0%)	14 (7.4%)	23 (6.2%)
5	18 (9.9%)	27 (14.2%)	45 (12.1%)
6	3 (1.7%)	7 (3.7%)	10 (2.7%)
7	2 (1.1%)	5 (2.6%)	7 (1.9%)
8	0 (0.0%)	2 (1.1%)	2 (0.5%)
9	0 (0.0%)	1 (0.5%)	1 (0.3%)
10	10 (5.5%)	34 (17.9%)	44 (11.9%)
11	0 (0.0%)	1 (0.5%)	1 (0.3%)
12	0 (0.0%)	3 (1.6%)	3 (0.8%)
13	0 (0.0%)	1 (0.5%)	1 (0.3%)
15	2 (1.1%)	6 (3.2%)	8 (2.2%)
16	0 (0.0%)	1 (0.5%)	1 (0.3%)
20	5 (2.8%)	10 (5.3%)	15 (4.0%)
30	0 (0.0%)	2 (1.1%)	2 (0.5%)
50	0 (0.0%)	2 (1.1%)	2 (0.5%)
合計	181	190	371

Table 5. 回答者の性ごとに示した嫌悪男性人数の度数

嫌悪男性人数(人)	男性回答者	女性回答者	合計
0	67 (36.6%)	70 (37.2%)	137 (36.9%)
1	30 (16.4%)	35 (18.6%)	65 (17.5%)
2	31 (16.9%)	32 (17.0%)	63 (17.0%)
3	20 (10.9%)	17 (9.0%)	37 (10.0%)
4	6 (3.3%)	5 (2.7%)	11 (3.0%)
5	12 (6.6%)	18 (9.6%)	30 (8.1%)
6	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
7	2 (1.1%)	1 (0.5%)	3 (0.8%)
8	1 (0.5%)	1 (0.5%)	2 (0.5%)
10	10 (5.5%)	8 (4.3%)	18 (4.9%)
20	3 (1.6%)	0 (0.0%)	3 (0.8%)
合計	183	188	371

Table 6. 回答者の性ごとに示した嫌悪女性人数の度数

嫌悪女性人数(人)	男性回答者	女性回答者	合計
0	91 (50.3%)	66 (34.9%)	157 (42.4%)
1	29 (16.0%)	30 (15.9%)	59 (15.9%)
2	19 (10.5%)	31 (16.4%)	50 (13.5%)
3	15 (8.3%)	25 (13.2%)	40 (10.8%)
4	7 (3.9%)	8 (4.2%)	15 (4.1%)
5	6 (3.3%)	21 (11.1%)	27 (7.3%)
6	1 (0.6%)	2 (1.1%)	3 (0.8%)
7	3 (1.7%)	1 (0.5%)	4 (1.1%)
8	3 (1.7%)	1 (0.5%)	4 (1.1%)
10	4 (2.2%)	3 (1.6%)	7 (1.9%)
16	1 (0.6%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
20	0 (0.0%)	1 (0.5%)	1 (0.3%)
30	2 (1.1%)	0 (0.0%)	2 (0.5%)
合計	181	189	370

Table 7. 回答者の性ごとに示した各測定変数の平均値および性差

項目	平均(SD)		回答者数(n)		<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>
	男性回答者	女性回答者	男性	女性			
被嫌悪男性人数	1.66(2.56)	1.37(2.37)	182	186	1.12	366	.263
被嫌悪女性人数	1.45(2.62)	1.88(2.29)	181	188	1.68	367	.094
被好意男性人数	4.63(5.11)	2.53(3.45)	179	188	4.59	310.39	.000
被好意女性人数	2.87(4.12)	5.88(5.27)	181	186	6.09	348.97	.000
嫌悪男性人数	2.32(3.43)	1.92(2.43)	183	188	1.28	326.87	.201
嫌悪女性人数	1.55(2.49)	2.02(2.47)	179	189	1.81	366	.071

平均値は20人以下の回答に限定して算出した

パラメトリック統計量の利用にはやや難があるものの、本報告では目安として平均値と *t* 検定の結果を示す。回答には一部に極端に大きな数字が見られたため、20人以下の回答に限定して平均値を算出した (Table 7)。各条件とも被嫌悪人数は1.5名前後であり、回答者の性差について、被嫌悪女性人数には有意傾向が見られるものの、全体に明確な有意差はなかった。一方、被好意人数は、男性は男性の、女性は女性の人数が有意に多く、異性よりも同性から多数の好意が寄せられていると認知していることが示された。この場合も、女性が認知する同性からの被好意人数と男性が認知する同性からの被好意人数には有意差がみられ ($t=2.290$, $df=363$, $p<.05$)、女性の方が男性より多かった。嫌悪人数については、嫌悪男性人数には回答者の性差が有意でないものの、嫌悪女性人数に有意傾向が見られた。前述の分布の偏りとあわせ、嫌悪女性人数は女性が男性よりも多い可能性がある。全体に、男性回答者の嫌悪女性人数は約1.5人と若干少ないが、そ

他の条件においてはおおむね2名前後となった。これらの結果は、「苦手な人」の数について男女ごとを示した研究（日向野, 2007）で示された平均人数（同性の「苦手な人」の人数は男性回答者2.93人、女性回答者2.29人；異性の「苦手な人」の人数は男性回答者1.89人、女性回答者1.55人）と比較して極端な違いはなかった。なお、ここで示した変数間の一部の相関関係については河野ら（2014）を参照されたい。

被嫌悪人数総数と嫌悪人数総数の比較 回答者ごとに被嫌悪男性人数と被嫌悪女性人数の和を求め、被嫌悪人数の総数を算出した。同様に、嫌悪男性人数と嫌悪女性人数の和を求め、嫌悪人数の総数を算出した。この場合も極端に多い人数を報告した回答者を排除するため、各合計値が20人以下の回答者のみに限定して分析を行った。被嫌悪人数総数の平均値は2.98人（SD=3.80）、嫌悪人数総数の平均値は3.47人（SD=3.97）であり、これらの平均値間には有意差が認められた（ $t=2.299$, $df=350$, $p<.05$ ）。この調査の範囲では、大学生は男女込みにして平均約3.5名の嫌いな人がおり、かつ、約3名から嫌われていると認知していると考えられた。

このとき、回答者がおおむね閉じた集団内で対人嫌悪を互いに感じ合っていると仮定すると、被嫌悪状態を正確に認知できるなら嫌悪人数総数と被嫌悪人数総数が一致するはずである。一方、セルフサービングバイアス（Greenwald, 1980；遠藤, 1995）のような認知バイアスがかかっているならばこれらの平均値は乖離するだろう。今回の結果では嫌いな人数と嫌われている人数には差があり、自分が嫌っているほどは嫌われていないと認知していることを示す結果となった。これは、対人嫌悪に関する感受性にある程度セルフサービングバイアスがかかっていることを示唆している。しかし、今回の質問内容は嫌悪対象の範囲を閉じた集団内に限定したものでなかったため、数値の一致度と認知の正確さがどの程度対応しているか判断できない。この点を明らかにするためには、対象者の範囲を限定するなどした再調査が必要となろう。

最も嫌いな人の性別および年齢 最も嫌いな人を1名想起させ、その人物の性を尋ねた。この回答に基づき、回答者の性ごとに対象人物の性別人数を算出した結果を示す（Table 8）。各セルの度数の偏りは有意であった（ $\chi^2=119.2$, $df=1$, $p<.01$ ）。

Table 8. 回答者の性ごとに示した最も嫌いな人物の性の度数：数字は度数（人数）、括弧内は回答者の各性における嫌いな人の性別選択率

最も嫌いな人の性別	男性回答者(割合)	女性回答者(割合)	合計
男性	163(88.6%)	63(33.3%)	226
女性	21(11.4%)	126(66.7%)	147
合計	184	189	373

最も嫌いな人として同性を挙げたのは、男性が約9割、女性が約7割であり、この割合の差は

有意であった(2つの比率の比較検定による; $N1=184$, $N2=189$, $p<.01$)。男女とも同性嫌悪傾向が見られ、かつ、その傾向は男性に顕著だったといえる。この傾向は、「苦手な人」の人数を分析した日向野(2008)の結果とも一致する。

そのとき、最も嫌いな人の年齢は男性回答者で平均21.04歳($SD=8.41$)、最頻値および中央値は21歳(範囲3~60歳)だった。一方、女性回答者で平均20.79歳($SD=9.48$)、最頻値および中央値は21歳(範囲5~75歳)であった。これら男女の平均値について t 検定を行った結果、有意な差は認められなかった。男女とも最も嫌いな人として同年代を最も多く挙げたといえる。

前述の被嫌悪人数と嫌悪人数の分析(Table 1)からは性差に明白な有意差は認められなかったので、単純に嫌いな人の数を比較しても性差は現れにくいと考えられる。しかしながら、最も嫌いな人に限定した場合には、比較的明瞭に性差が現れた。基本的に、社会的な性役割(Lynn, 1959)の点からも、生物学的な性選択(概説は、Cartwright, 2000)の点からも、異性間よりも同性間に競争的状况が生じやすいと考えられる。特に、回答者の年齢においては男性間の競争圧力が高まっていると考えられる(Wilson & Daly, 1985)。したがって、人間関係においても同性間に葛藤が生じやすく、その結果として最も強い嫌悪の対象者に同性の他者が選ばれやすくなるものと解釈される。

被嫌悪自覚年齢 被嫌悪自覚年齢について、回答者の性別の記述統計を示す(Table 9)。男性回答者、女性回答者ともに平均約10歳となり、有意な差は見られなかった。

Table 9. 回答者の性ごとに示した被嫌悪自覚年齢

項目	平均(SD)		回答者数(n)		t	df	p
	男性回答者	女性回答者	男性	女性			
被嫌悪自覚年齢	10.39(3.45)	10.19(3.58)	126	167	0.50	291	.619

このとき、回答の最小値は男女とも3歳、最大値は男性19歳、女性20歳であり、中央値および最頻値は男女とも10歳であった。これらから、男女ともほぼ同一の頻度分布だったといえる。なお、3歳はまだ幼児期健忘の期間にあると考え4歳以上の回答に限定して平均値を求めてもほぼ類似した値になった[男性10.45歳($SD=3.40$)、女性10.32歳($SD=3.48$)]。このような懐古的な調査項目に対する回答には記憶の変容の問題がつきまとうため、数値そのものの妥当性および信頼性に疑問がある。しかし、10歳は児童期の半ば頃であり、この時期に子供の活動の中心が家族を離れて社会や友人に移行する(岩田他編, 1995「発達心理学辞典」)ことを考えると、社会化に伴う対人葛藤の増大を反映した数値としてある程度の整合性をもつものとも考えられる。

総合的考察

前述のように、対人嫌悪の機能の一部にはわれわれが大まかに互恵的な社会を構築するのを支援する側面があると考えられる。したがって、「嫌いな人の数」の平均値といった集団の対人嫌悪の水準は、その集団の互恵的関係の機能不全状態を反映している可能性がある。例えば、対人葛藤がほとんどない集団においては対人嫌悪が生じにくい一方、集団内の利害が激しく対立している上に利害調整が不全であるなら、人間関係上の葛藤場面が増加する結果、対人嫌悪の総量は増大するだろう。

ここで示した結果からは、測定の方法によって性差の現れ方が異なることが示された。これは、各性内と性間における社会関係、対人認知および対人感情の質の違いが反映されたものと思われる。したがって、集団の嫌悪の総量の把握という観点からは、嫌悪対象者数に加えて嫌悪強度などの側面を加味する必要があるかもしれない。

なお、本報告の測定においては、「嫌いな人」等に関する回答者の解釈が多義的である可能性が指摘できる。すなわち、ここで用いた単純な質問内容の場合、各個人の対人関係リスト中、どこからを「嫌いな人」と見なすかの判断基準が人によってかなり異なる可能性がある。そのため、区切りのよい人数で回答するといった、曖昧な人数把握を示唆する回答が一部で生じているものと思われる。この点を改善する方法として、「対人嫌悪」状態をより明確化するようなワーディングを用いることが考えられる。

また、対人嫌悪には、さまざまな要因が関与しうる。たとえば、本人の素因的な嫌悪感受性、対人関係に関する社会規範の内在化の程度、対人ストラテジーのモデルとなる養育者や集団内の仲間の存在などによって、その人がどの程度一般的に他者を嫌悪しやすいかが影響されるだろう。また、当該個人が置かれた社会的状況、とりわけ、所属集団の凝集性、所属する集団内の利害の過酷さ、集団内の極端に逸脱した他者の数、所属集団における社会的地位などによって、その時点での対人嫌悪の起こりやすさが変化するだろう。これらの結果としてある個人の対人嫌悪が規定されているものと思われる。対人嫌悪の研究としては、これらの要因および要因間の関係を明らかにしていくことが望まれる。

なお、本報告の調査対象者は大学生であり、社会人に比べて個人間の利害対立や社会的立場に起因する葛藤が少ないと考えられる。今後は、社会人を含む対象者を設定して、ここで用いたような単純な測度がどの程度の妥当性と信頼性を示しうるか、また、集団の互恵性の不全をどの程度反映するのかを検討することが課題となろう。

引用文献

- Balliet, D., Li, N.P., Macfarlan, S.J. & Van Vugt, M. 2011. Sex differences in cooperation: A meta-analytic review of social dilemmas. *Psychological Bulletin*, 137, 881-909.
- Cartwright, J. 2000. *Evolution and human behaviour*. New York: Palgrave.
- 遠藤由美 1995. 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論. *社会心理学研究*, 11, 134-144.
- Greenwald, A. G. 1980. The totalitarian ego: Fabrication and revision of personal history. *American Psychologist*, 35, 603-618.
- 日向野智子 2007. 対人苦手意識が社会的スキルに及ぼす影響－同性の苦手な友人と同性の友人との比較－. *日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集*, 16, 150-151.
- 日向野智子 2008. 対人苦手意識の生起と相互作用の過程に関わる社会的スキル－一般的他者に対する社会的スキルと苦手な他者に対する社会的スキルにおける質的差異の検討－. *立正大学心理学部研究紀要*, 6, 39-49.
- 岩田純一 他 (編), 1995. *発達心理学事典*. ミネルヴァ書房.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2014. 他者から嫌われることを避ける傾向の個人差. *東海学園大学研究紀要*, 19, 155-165.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2015. 対人嫌悪の理由と対処の関係－被嫌悪回避傾向を考慮して－. *東海学園大学研究紀要*, 20, 127-137.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2016. 嫌悪対象者に対する援助傾向－援助を抑制する特徴は何か－. *東海学園大学研究紀要*, 21, 123-129.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 印刷中. 対象者への嫌悪と資源認知はどのように援助傾向を制御するか. *日本感情心理学会第24回大会発表論文集*.
- Lynn, D. B. 1959. A note on sex differences in the development of masculine and feminine identification. *Psychological Review*, 66, 126-135.
- 落合良行, 佐藤有耕, 1996. 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. *教育心理学研究*, 44, 55-65.
- 斎藤明子, 2003. 対人嫌悪感情に対する社会心理学的研究. *九州大学心理学研究*, 4, 187-194.
- Regan, D. T. 1971 Effects of favor and liking on compliance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 627-639.
- 竹村和久, 高木修, 1990. 対人感情が援助行動ならびに非援助行動の原因帰属に及ぼす影響. *実験社会心理学研究*, 30, 133-146.
- Trivers, R., 1971. The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.
- Wilson, M., & Daly, M., 1985. Competitiveness, risk taking, and violence: The young male syndrome. *Ethology & Sociobiology*, 6, 59-73.

謝辞 本研究は JSPS 科研費 26590135 の助成を受けた。